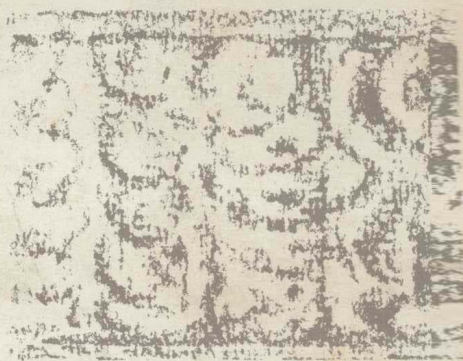


石の声



宗教・文学・紀行

石の声

遠藤周作

冬樹社

石の声

定価 一〇〇〇円

昭和四十五年十二月三十日 第一刷

著者 遠藤 周 作

発行者 高橋 直 良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町二の一八

電話 (二六四) 〇三 四 六

郵便番号一〇一 振替東京七七五七

印刷所 広研印刷株式会社
製本所 加藤三代治製本所

石の
声

遠藤
周作

装帧
笠原須磨生

目 次

A

シャルル・ペギイの場合	9
※ジャック・リヴィエール	18
ランボオの沈黙をめぐって	34
テレーズの影を追って	47
作家と読書	66
ジイドと私	72
『モラエス』	75
サド侯爵の城	86
第二回サド裁判をむかえて	91
無罪になったサド裁判	94

B

神々と神と	99
カトリック作家の問題	105
基督の顔	115
ユダと小説	120
切支丹時代の智識人	126
父の宗教・母の宗教	129
悪魔についてのノート	140

C

芸術の基準 155

芸術交流体について

159

新聞小説について

170

わが小説 175

私の小説作法 178

私の文学 181

合わない洋服 190

小説と戯曲 194

出世作のころ 197

「海と毒薬」ノート 213

外国を舞台にした小説の難しさについて

220

ユーモア文学のすすめ 224

笑いの文学よ、起これ 228

D

エルサレム巡礼 235

旅の日記から 240

リヨンの四季 249

ぼるとがる紀行 276

A

シャルル・ペギイの場合

此の一、二カ月の間、様々の雑誌が、ドストエフスキイを論じている。今、僕の手もとにある「個性」「近代文学」「思潮」「世界文学」など、これらの諸雑誌にはドストエフスキイの討論会が開かれ、或は、特集の頁が割かれている。彼のあの藪^{しづ}睨んだ様な眼差しが二十世紀を覗いている。彼の諸問題はその作中人物と同じようにどす^{しづ}駸い凝^{しづ}を持って人が見通す事を防いでいる。第一、彼は、基督教作家であったか、否かさえ、疑問となってくる。彼の唇のあたりには、彼を論ずる者たちを嘲けるような、奇怪な嗤いさえ浮んでいる。彼がえぐり出したのは人間の魂の根源が持っている二律背反の問題である。「悪と選択の問題」「人間の限界の問題」「神の自由と人間の自由の問題」……ベルジャエフの好みのこうした言葉の背後には解決不可能に近い二律背反の謎がかくれている。彼は、それをただ、はっきりと光をあて、露呈したにすぎぬ。

様々の角度から、彼を読む事は自由である。だが、ドストエフスキイの作品から一つの「基督教護教者^{プロテスタント}」をとりだす事は、容易ではあるが、それは彼が小説家である事を忘れてゐる。優れた基督教作家には護教の意識など決してないのだ。彼は、ただ一つ、人間を、但し、真の現実と、

眞の人間とを描く事を試みるのみである。ドストエフスキの場合も、彼は人間の魂の二律背反の問題を容赦なく抉摘したのであり、その二律背反の問題は、恐らく「神」がいれば、解決の光を与えうるが神がいなくては、それは解し難い黝い縄れとなる。だからと云って、ドストエフスキは、*deus machina* にその問題を一挙、両断はしなかった。聖者を除いて如何なる信仰者にも、そのような確信はありえない。ドストエフスキの生涯の課題の一つが「神があるか、ないか」と云う人間最大の対話であつた理由はそこにある。

「水晶宮」の問題、「イヴンとアリョーシャ対話」の問題、「大審判官」の問題……等の中にある無神論社会主義の問題も、この二律背反の微妙な点に絡っている。云うまでもなくドストエフスキの知つていた社会主義は、今日のコンミニズムから見れば幼稚なものであるが、彼の予言者的な炎のような眼は、一切の無神論性の核心を、はつきりと見てとつたのであつた。

例えば、あのイヴンの問がある。「未来のユートピアは、一人の赤坊の泪の上に建てられてよいか」この簡単な問の中には、恐らく今日の最も切実な課題が含まれている。目的と手段、犠牲と償い……サルトルは「穢れた手」を書き、ケスラーは「零と無限」を書いた。主題は一つであつた。この課題を解きうるのは、コンミニズム、宗教か。コンミニズムは、果して、かかる人間の魂の形而上的課題をも、鎮める事が出来るか。よし解きえなくとも、鎮める事は出来るか。ドストエフスキは人間的次元では、解決の余りに厳しい二律背反の問題を提出したままたち去つた。人間的次元で解決困難な問題を、今一つの次元を設定する事によって考えればそれは、一見、やさしく見える。だから、あの「個性」の座談会で基督者の口調は確信に充ちていたし、断定的であつた。

荒「神がない場合、水晶宮のために流された血潮を誰があがなってくれるかと云う疑惑……
そういうものが、神なしで解答可能になれば、エゴイズムとヒューマニズムの問題も解決の緒口
をえると思います」

赤岩「解答不可能でしょうね」

荒「コンミニズムでは『神』なしで解答できると思う」

赤岩「世界と歴史との終末の中に永遠な神の約束を待ち望む、キリスト者は神なしに解答出来る
とは云えない」

・荒「つまりドストエフスキを超えた所に『神』をみるか、コンミニズムを見るかという問
題なのだよ」

赤岩「その時『神』の外でやってゆくなら、予言しておくが、必ず、もう一度、人間は破れ
る」

……僕は一人の信仰者として、もとよりこの赤岩氏の確信に充ちた速断を否定するのではない。
赤岩氏は神学者である。然し、個々の信仰者の心理は文学の領域に属する。恐らく聖者を除いて
は、人は信仰をえたからとて、彼の苦悩と不安と探究とは去ったのではないのである。信仰に於
ても苦悩と不安とは消える事はない。否、時には信仰者である故にかえって彼の不安と苦悩の倍
加する時さえあるのだ。

此のドストエフスキが二律背反のままに、二十世紀の今日に解答を命じた「未来の水晶宮の
ための犠牲と償いの問題」「未来の王国^{ユーピア}のために、一人の赤坊の泪を犠牲にしうるか」と云う問
題は——基督教に於ける償いが、即ち、高次の次元からの解決が一見、一切を救うかのように見

えるかも知れぬ。けれども、果して、無神論的社會革命にとつて、困難な此の問題解決の厳しさが赤岩氏の考える如く、信仰者に対しては全く取り除かれるものなのであるか。僕は文學徒である故、個々の信仰者の心理について云つてゐるのである。『神』の外ではなく『神』の内で行つた場合、それ程、確信を持つて可能なりと速断しうるものであらうか。時には、その信仰の故に、問題の厳しさと重荷とが、一層加重する場合がないだらうか。僕は、あの社會主義者にして神秘的詩人、シャルル・ペギーの事を考へてゐるのである。

今更、この詩人の履歷について、縷々と述べる必要もあるまい。その技倆も紙面も僕は今、持つてゐない。僕はただ、先程、提出した課題に絡めて、ペギーの苦悩を形而上的に考へていくに留めよう。一九〇〇年、巴里のラテン辺の、ささやかな編集所から發刊された「半月手帳」、この雑誌を通して、二十七才のシャルル・ペギーは、その出発点に於いて、所謂、社會主義者と、全く表裏してゐたのであつた。ペギーは資本主義と共に、現代を、現代の病症を批判し、それを烈しく責めたのである。現代の病症、まず第一に合理性への絶對的信賴、第二に進歩に対する過信、第三に、政治と金との優位とを——それらは、根底に於て「ミイステイクの喪失」につきると云えよう。現代の合理性への絶對的信賴。(ペギーの青春時代には、それはテーヌやルナンの実証主義となつてあらわれていた。)ペギーは合理主義や機械主義を否定したのではない。それに対する人間の絶對的信賴が、現代において、彼等の魂の上に大きな失陥を与えた事を責めたのであつた。經驗事実の上にのみ、理性の土台を置き、万事を知りうると云う人間の確信は、人間の精神領域を余りにも狭くしないであらうか。人間の本質であるポエジイと、神秘的なるものへの夢とは此

処にあっては、無慘に喪^{うしな}なわれるであろう。「吾々の認識は認識しうる世界に比べれば何ものでもなく、吾々の生命力から比べれば、何ものでもない」ペギイが、ベルグソンの哲学に、あの創造的進化とエラン・ヴィタルに、呼吸をとり戻しえた理由もそこにある。第二の現代の病症、それは進歩に対する、就中、物質進歩に対する盲信である。それは唯物的認識の秩序の中で、又日常の実践の中にすらも、吾々が、あらゆるものに於て進歩し、あらゆるものを獲得し得ると考える。あらゆるものを獲得せんとする人間の心理は、何時か「量に対する尊敬」に転化する。この量への跪拜が、(1)哲学に於ては、崇高なるものの否定を、(2)社会秩序に於ては、凡庸主義と人間の社会的不平等性を温存する諸制度とを、(3)道德面に於ては、人間の貪婪と、あくなき欲望とを生むものとペギイは考えた。「量に対する跪拜」、その現代における象徴こそ、「金^{アルジャン}錢」に他ならぬ。ペギイは、この呪うべき現代の神の名を二冊の著作の題名とし、この神が人間の一切の精神性と靈性とを喰い破る姿を描き、非難し尽したのである。政治上において凡庸主義が、群集の最も低い感情に訴える一方、金^{アルジャン}錢への欲望は、人間の魂の一切の精神的なるものを駆逐する。仕事に対する労働者の静謐な愛着は、現代には既がない。ブルジョワジイの連帯の根本を形づくるのも亦、金^{アルジャン}錢である。かつて人々は「貧^{アルジャン}し」だったが、悲慘ではなかった。かつて人は金^{アルジャン}錢よりも、もっと高貴な自己の威厳を知っていた。

此処で、ペギイは「清^{ポワイズ}貧^{アルジャン}」と「悲^{ミゼラブル}慘^{アルジャン}の意義」の區別をはっきりと認めた。恐らくそれを書きながらペギイの心は、彼がその幼年時代を育まれた土地オルレアンの事を思い出したのかも知れぬ。彼が詩劇「聖ジャンヌ・ダルクの愛の秘義」において「ロワールの国なるオルレアン」と頌^ほめ歌った故郷を。ロワール地方と巴里を結ぶ街道の街、此処で父を失ったペギイは、書く事も読む

事も知らなかったが、彼に「美しい、古い仏蘭西語」を教えた祖母に育てられたのだ。此処では人々は、貧しかったが、悲惨ではなかった。彼等は自分の仕事の技術を愛していた。彼等は希望があり、恐れがあったけれども、巴里では「貧困」は悲惨に転ずる。悲惨とは、ペギイが見抜いた一切の現代の病症がもたらした地獄である。一切の精神性の見失われた悲惨は人間を不幸にするのみならず、地獄に追うのだ。ペギイが此処で、地獄と云う言葉を使ったのは、この悲惨が、「清貧」と異り、一切の希望を剝奪されているが故である。絶望の状態、一切の救いの望みなき絶望の状態を基督教は、地獄と呼ぶが、まさしく、ペギイも亦、現代の病症の行きついた世界を、地獄と名づけたのである。

恐らく、此の様な現代の批判だけならば、別にペギイの論はこと新しいとは云えぬ。他の基督教的な文化批評家は、ルネッサンス以後、神を見喪った現代を、様々な角度から批判している。若し詩人的な洞察力を抜けば、ペギイの現代批判は、マリタンや、ベルジャエフやドウソンの歴史的考察に比べれば、智識的にも狭く、独断的でもあろう。けれども、問題は、此の現代の悲惨を痛烈に批判した彼が、「改革者」として身を起した時に、彼が味わねばならなかった苦悩なのだ。Hic incipit tragedia (悲劇はここに始る) のだ。

ペギイの社会革命は、精神革命を主軸とする。勿論、現在の社会的制度は革新されねばならぬ。それが人間の靈性の優位を破壊するものである限り、それは改新されねばならぬ。僕は此処で、彼のカトリシスムへの歩みよりを、詳細に語る紙面がない。けれども、本質的に神秘主義的詩人であり、その社会革新の土台を精神的なるものの強調においたペギイが、マリタン夫妻やエミ